研究ノート

ライフデザイン学研究 16
p.359-367（2020）

形成的アセスメントとしてのNBAS（Narrative Based Assessment System）の可能性

―タグ付けられた保育記録の分析とフィードバックを通して―

Possibility of Narrative Based Assessment System as formative assessment
― Analysis and feedback of recordings written by nursery teacher ―

高橋健介*　伊藤美佳　早坂聡久
TAKAHASHI Kensuke, ITO Mika, HAYASAKA Satohisa

要旨

本研究では、クラウド・コンピューティングを活用したナラティブによる保育記録やその分析による形成的アセスメントが、保育における子どもの学びや育ちに対して実証性のあるエビデンスとなり得るのか、その可能性を検討している。その一環として、ある認定こども園のクラウド・コンピューティングを活用した保育記録を分析し、保育および保育記録の評価・改善に生かすことができるのかを検討した。保育記録の分析結果をおおよそひと月ごとに保育者にフィードバックし、その過程を通して、保育記録にどのような変容があるのかを検討した。

その結果、保育記録を分析、フィードバックしたどのクラスにおいても出現数の変動係数はおおむね減少傾向にあった。つまり、保育記録での子どもの出現数のバラツキはどのクラスにおいても減少傾向にあったのである。よって、ある期間（１週間、１ヵ月など）での子どもの出現数を保育者が確認していくことで、顕著な偏り（バラツキ）を減らし、クラスの子ども一人ひとりを漏れなく見取り、記録することにつながることが考えられた。

キーワード：形成的アセスメント　保育記録　クラウド・コンピューティング　フィードバック

*東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科　Toyo Univ. Faculty of Human Life Design
連絡先：〒351-8510　埼玉県朝霞市岡48-1

１．はじめに

本研究では、2017年より、幼保連携型認定こども園Mこども園にて実施されているGoogleフォームによる保育記録等を活用した形成的アセスメントの取り組みをNarrative Based Assessment System（以降、NBASとする）と名付けた。さらに、NBASを「保育における子どもの姿やその思いにより添う保育者の語り・記録を基盤としながら、同僚との対話（カンファレンス）や記録の分析・フィードバック等によって保育者の見取り・読み取りを補完することで、子ども理解の質を高め、実践の改善に生かしていくための形成的アセスメントのシステム」と定義した。

そこで本発表では、保育記録の分析・フィードバックによる保育記録やその実践の変容について検証し、NBASにおける保育記録の分析・フィードバックが保育実践の改善のリソースと成り得るのかその可能性を検討していきたい。

２．保育記録と評価について

保育所保育指針第１章総則の「保育の計画及び評価」において、「記録」については「子どもの実態や子どもを取り巻く状況の変化などに即して保育の過程を記録する」と位置づけている。さらに、「保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性を向上や保育実践の改善に努めなければならない」と記載されている。指針そのものには記録および評価においては、子どもの発達との関連性が強く位置付けられているわけではない。指針で明記されている「評価」とは、自己評価とほぼ同義であり、保育所や保育者自身の保育を評価するものと位置づけられている。しなしながら、保育所保育指針解説では、保育者の自己評価について、「自己評価は、子どもの育ちとニーズを把握し、発達を援助する上でより適切な環境や働きかけを検討することを目的として行うもの」と記載されている。つまり、子どもの発達（育ち）に対する理解は、そのものを評価として位置づけているのではなく、保育者が自己評価をおこなうための一つのリソースとして位置づけられていることが考えられる。

一方で、幼稚園教育要領で明記にされている「評価」そのものは、保育所保育指針のように保育の評価（「自己評価」）を意味しているのではない。2017年に改訂された幼稚園教育要領では、第１章総則に「第４指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」に関する項目が加わった。その中で「幼児一人一人の発達の理解に基づいた評価の実施」と示されているように、子どもを対象とした評価の必要性とともに、その評価を子どもの発達理解を柱とする評価と位置づけられている。一方で、評価実施上の配慮事項として「幼児一人一人のよさや可能性を把握し、指導の改善に生かすようにすること」としている。つまり、子どもの発達理解による評価そのものを目的とするのではなく、ここでの評価は、指導の改善を目的とする形成的アセスメントと位置づけていることが考えられるのである。その意味では、保育所保育指針においても発達理解をリソースとする保育の自己評価を必要としており、これを形成的アセスメントとして位置づけられることが考えられる。

その上で幼稚園教育要領において評価は「一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではない」としている。そのことによって、「発達の理解に基づいた評価」とは具体的にどの

ようなものを指し示しているのか、評価に対する理解を困難にしていると言わざるを得ない。つまり、課題としては、保育における「発達の理解に基づく評価」の位置づけを明確にして、形成的アセスメントとして、「発達の理解に基づく評価」をカリキュラム・マネジメントにどう機能させるかを検討する必要があると考える。

3．保育記録の分析とフィードバック

（1）保育記録の概要

NBASの柱の一つとなるMこども園の保育記録はGoogleフォームを使用し、ナラティブ・アセスメント（エピソード記録）をベースとした記録を入力している。Googleフォームによる保育記録は、必要な際は個人の記録も入力しているが、特に3・4・5歳児クラスでは遊びを展開する小集団での記録がベースとなっている。なぜならば、集団保育の遊び場面において保育者はそれぞれの遊びを、小集団をベースにして捉えていることが多く、その上でそれぞれの遊びの展開や人間関係、そして子ども一人ひとりの姿を見取っているからである。ナラティブアセスメント（エピソード記録）には、遊びに参加していた子どもの氏名、遊びの名前、記入するエピソードに関連性のある5領域、10の姿がタグ付けされる。

記録時間は約30分を目安としており、クラスで1日3～4件の記録が入力される。1日ですべての小集団や個人を記録することは、特に記録時間の関係で困難であるが、ある一定の期間（1週間など）ではクラスの子どもを漏れなく見取り、記録するようにしている。

（2）保育記録の分析方法について

2019年度は、Mこども園4・5歳児クラス（5クラス）の保育記録を樋口耕一氏が開発したフリーソフトウェアKH coderを用い、テキストマイニングによって分析した。その結果は、棒グラフ、共起ネットワーク、対応分析によって図で示した。分析結果はプリントアウトをして、2019年6月より、おおよそ2ヵ月ごとに担任保育者に渡し、フィードバックをした。分析結果のフィードバックは、保育者が自らの保育記録から保育をふり返り、改善していく形成的アセスメントのための一つのリソースとして活用することを目的としている。

フィードバックをした分析結果は、2019年度は「子どもの出現数」「共起ネットワーク（子ども）」「対応分析（子ども×遊び）」「10の姿数」「対応分析（10の姿×遊び）」「共起ネットワーク（エピソードの語句×遊び）」の5つであるが、本発表では、その中から保育や記録の改善につながりやすいと現段階で考えられた「子どもの出現数」「共起ネットワーク（子ども）」「対応分析（10の姿×遊び）」に絞って検討していきたい。

（3）分析・フィードバックの内容と記録の変容

①子どもの出現数

クラスの子どもそれぞれの保育記録における出現数を＜図1＞の例ように棒グラフで示した。さらに、子どもそれぞれの出現数に対して、そのバラツキ具合を確認するために本グラフと併せて、当該

月の子どもの出現数の変動係数を付記した。変動係数は、「出現数の標準偏差」を「出現数の平均」で除した値である。子どもの出現数のバラツキ具合（変動係数）に着目するのは、ある一定期間での保育記録における子どもの出現数およびその変動係数を確認していくことで、出現数の顕著な偏りを減らし、クラスの子ども一人ひとりを見取り、漏れなく記録することにつながると考えるからである。

なお、2019年４月～12月の対象となったクラスの変動係数の推移は＜図２＞の通りである。子どもの出現数のバラツキ（変動係数）の推移は多くのクラスでおおむね減少傾向にあり、11・12月の変動係数はすべてが0.3以下であった。ちなみに、2019年度は６月のフィードバック時より、変動係数が0.3以下になることを目安に取り組んできている。

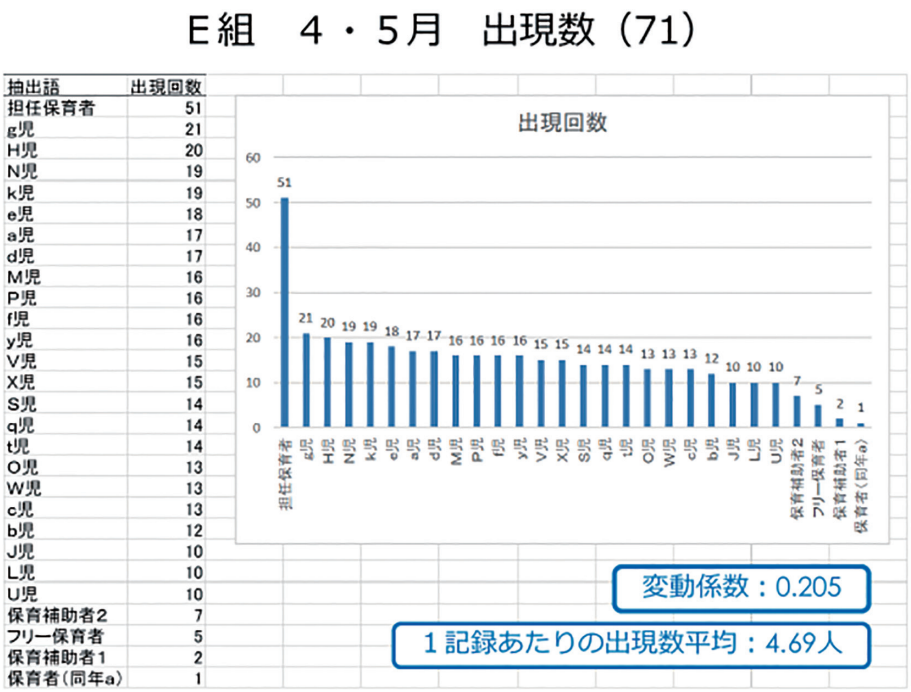


図１　出現数（子ども）の例

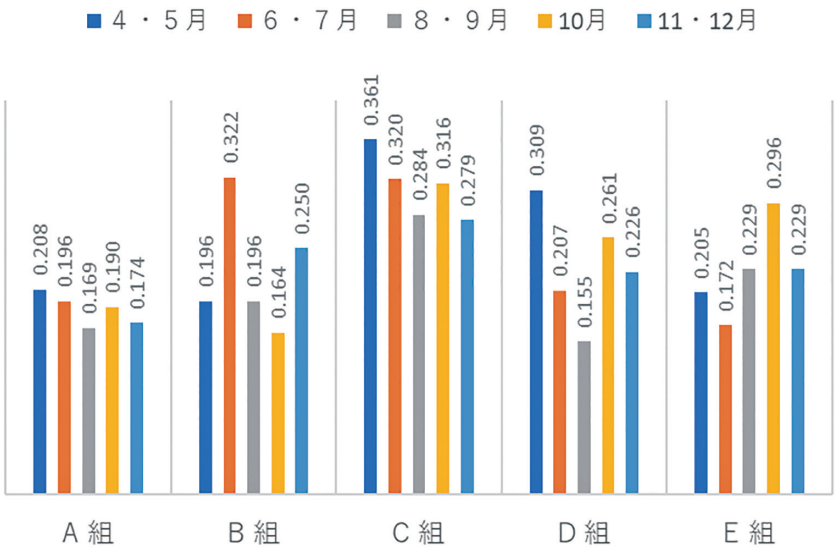


図２　変動係数（子どもの出現数）の推移

②子ども同士、子どもと保育者の関係　＜共起ネットワーク（子ども）＞

保育記録の中で共起している子ども同士、子どもと保育者の関係を共起ネットワークで分析し、＜図１＞＜図２＞のように示した。本項目の共起ネットワークでは、保育記録において共起した頻度の高い子どもや保育者との関係を線や点線で結ばれている。さらに、共起関係が強い子どもや保育者が同色で区分される。そのことによって、クラス内での子ども同士の関係、子どもと保育者との関係における子どもそれぞれの状況を確認することができる。

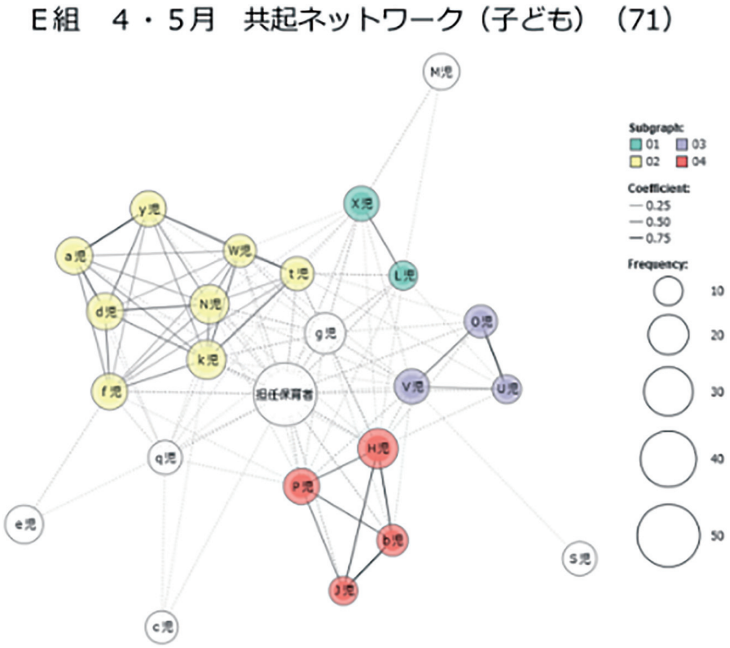


図３　共起ネットワーク（子ども）の例①

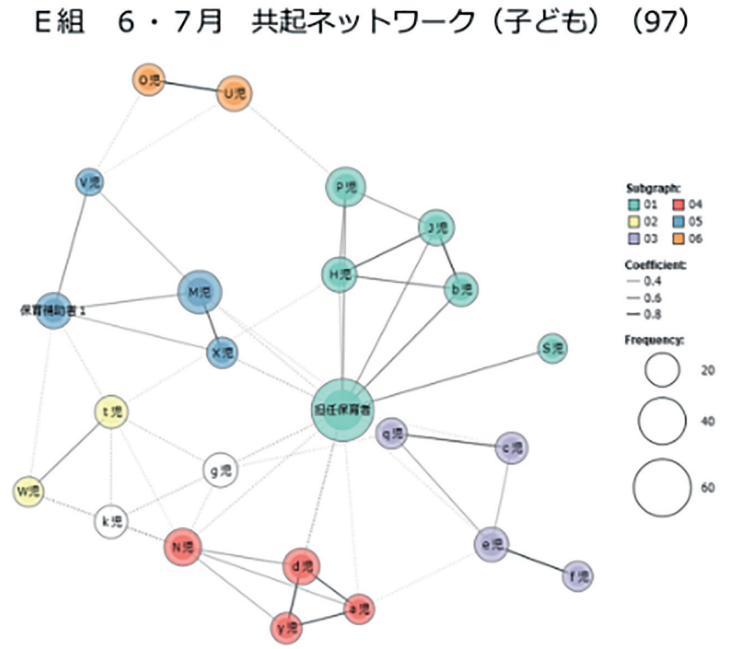


図４　共起ネットワーク（子ども）の例②

＜図３＞の共起ネットワークでは、複数ある同色のグループから外れ、さらに共起する関係が他と比較して少ない子どもが見られる。これらのケースについては、もととなる記録を確認すると、その子どもは一人での遊びの姿が多く記録されていたのではなかった。つまり、特定の仲間との関係やその遊びが安定していなかったためにこのように図示されたのである。このような分析結果から、保育者は当該月の子どもの状態をふり返り、必要ならば、次の月には特に気にかけて見取り、援助する対象になることが考えられる。＜図２＞は、＜図１＞の次の月の共起ネットワークであるが、先の仲間関係が安定していなかった子どもは、記録上は継続し安定した仲間関係での遊びに変容していったことが考えられる。

③10の姿と遊び・活動の関係　＜対応分析（10の姿×遊び）＞

NBASの保育記録では、ナラティブ・アセスメント（エピソード）に、その内容に関連する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以降、10の姿）をタグ付け（複数可）している。ちなみに、Mこども園の１～４歳児クラスでは、10の姿に関連し、それぞれの学年の育ちや学びに応じた内容を独自に作成し、その内容に応じてタグ付けをしている。10の姿をタグ付けし、確認していくことは、保育者個人の志向にとらわれ過ぎず、多様な観点から育ちや学びの姿を捉えたり、ふり返ったりすることに機能すると考える。

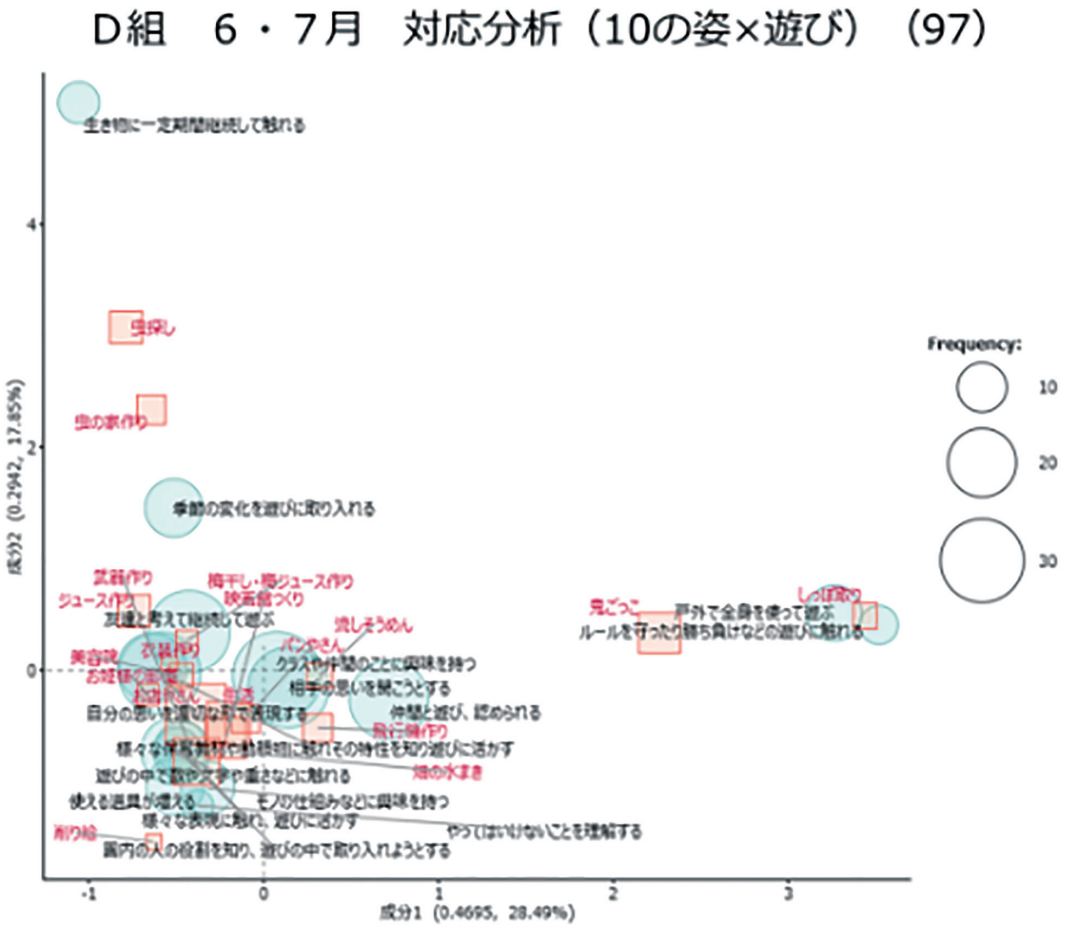


図５　対応分析（10の姿×遊び）の例①

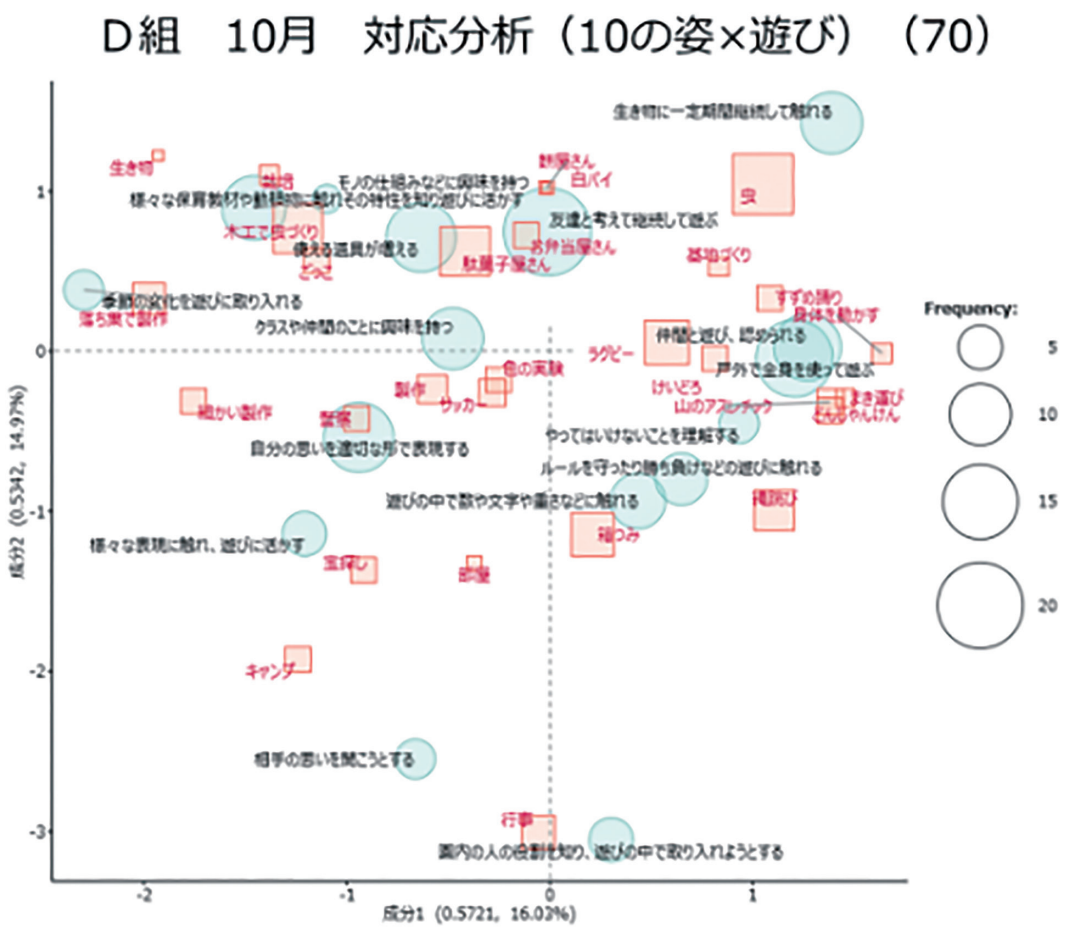


図６　対応分析（10の姿×遊び）の例②

分析・フィードバックでは、10の姿と遊びとの関係を対応分析によって図に示した。保育者が捉えた10の姿と遊びでの姿との関係を確認することができる。＜図３＞は、ある４歳児クラスの６・７月に記録された遊びと10の姿との関係を対応分析で表した図である。本図では、多くの遊びと10の姿が原点（x軸とy軸の接点）の近くに集まっており、多くの遊びが10の姿の特定の項目（複数）では特徴づけ難いといった傾向が考えられる。それと比較して、同クラスの10月の図＜図４＞では多くの遊びと10の姿が原点からより離れ、さらに多くの遊びや10の姿が分散して図示されている。これは、それぞれの遊びの姿がその近くにある10の姿（複数）によって特徴づけられているといった傾向が考えられる。

４．まとめと課題

2018年度に引き続き、2019年度においてもMこども園の一部のクラスで保育記録の分析・フィードバックを行った。分析・フィードバックを繰り返す中で、保育実践やその記録の改善につながる可能性のある項目や観点をいくつか見出すことができた。

１つめは、保育記録での子どもの出現数やそのバラツキを変動係数を目安に確認していくことである。これは、クラス全体の子どもをバランスよく、そして漏れなく見取ることへの効果があると考え

る。特に、見取りや記録の少なかった子どもをより意識して見取ることにつながることが考えられる。

２つめは、子ども同士や子どもと保育者との関係を表した共起ネットワークについてである。このデータからは子どもの仲間関係の継続性を確認することができる。その一方で、仲間関係が安定していなかった子どもの状況等に気づき、必要であれば、その先の見取りや援助につなげていくことが考えられる。

そして３つめは、遊びと10の姿との関係を表した対応分析である。子どもの遊びやその姿に対する評価はある特定の項目に固定されず、総合的な視点で評価されるべきである。一方で、総合性が過度に強まることで本来遊びの姿それぞれで捉えられる育ちや学びの特徴に対する理解が曖昧になることが考えられる。遊びを通した育ちや学びに対し、総合的な視点を保ちながらも、その特徴を見極める。そのことによって保育内容やその環境、そして子どもの見取りへの多様性を保障し、改善していくためにも本項目の対応分析は効果的と考える。

しかしながら、本分析やそのフィードバックにおいては、クラス全体や遊びの集団の状況およびその傾向を把握しやすいが、子ども個々の育ちや学びのプロセスを容易に把握し、それを保育の改善に生かしていくことには困難があった。このような課題もあり、Googleフォームによって集約、蓄積された小集団の保育記録からスムーズに個人帳票を作成するシステムを開発し、形成的アセスメントに生かしていくことにした。

＜註＞

糟谷咲子（2018）保育所・幼稚園における園務情報化の課題についての一考察．岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要．第50巻．10

河邉貴子（2005）遊びを中心とした保育 保育記録から読み解く「援助」と展開．萌文書林．p39

＜参考文献＞

磯邉聡（2016）教育臨床の現場で科学の知をどう駆動するか―エビデンスとナラティブをめぐる一考察―．千葉大学教育学部紀要．第64巻．34-41

奥野雅子（2011）ナラティブとエビデンスの関係性をめぐる一考察．安田女子大学紀要．第39巻．69-78

謝　辞

本研究をおこなうにあたって、Mこども園の園長先生をはじめ、先生方には多大なご支援とご協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

Possibility of Narrative Based Assessment System as formative assessment
— Analysis and feedback of recordings written by nursery teacher —

TAKAHASHI Kensuke, ITO Mika, HAYASAKA Satohisa

This study was reviewed narrative recordings using cloud computing written by nursery teacher. It examined whether these records provide evidence of child development and learning. We analyzed the records of certified center for early childhood education and care and examined whether it could be used for improving childcare. The feedback of the analysis results to the nursery teacher examines what changes have been made to the records.

As a result, the coefficient of variation of the number of children's records tended to decrease in all classes fed back. It was thought that, for a certain period of time, checking the number of recorded by the nursery teacher would reduce noticeable variability and lead to complete monitoring of the child.

Keywords：recordings written by nursery teacher, cloud computing, feedback

原稿受領2020年10月 9 日